

ヘミングウェイ「僕の父」の全体構造と冒頭文、終末文の関係

はじめに

ヨーロッパの息子としてのアメリカ。これは度々言われることであり、実際に父親と息子を題材にした作品がアメリカ文学には数多い。アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) も父親と息子の関係を描いた作品を数多く生み出しているが「僕の父」 (“My Old Man”)¹ は母親が登場しない世界の中で、少年の視点で父親を観察する興味深い作品である。少年の語り口ゆえに、理路整然としたものではなく、矛盾を示すような語り方が時に展開される。作品冒頭を引用してみよう。

I guess looking at it, my old man was cut out for a fat guy, one of those regular little roly fat guys you see around, but he sure never got that way, except a little toward the last, and then it wasn't his fault, he was riding over the jumps only and he could afford to carry plenty of weight then. (151)

太りやすい体質というのは、実際にそうならなかった父親の何を見てそう考えたのだろうか。人生の後半で太りだしたのは、父親のせいではない、というのなら一体何が原因なのだろうか。太るのは自分に原因があるのであり、他に要因を探すのは的外れなことであろう。論理の通らない書き出しである。競馬の障害レースにしか出ていない、というのは太る理由にはならない。

ヘミングウェイの語りの特徴を Donald A. Daiker は “ Hemingway's three major technical achievements in dialogue are minimum speech with maximum meaning, the elevation of banality into art, and the blurring distinctions between the genres of drama and fiction ” (563) とし、語りの意味の多重性を述べている。また同じように Lisa Garrigues はヘミングウェイの文章は短いながらも時に “ Hemingway also had a penchant for the long, labyrinthine

sentence ”(62)とし、文章の含蓄性を説明している。そして Teodóra Dömötör はヘミングウェイの別の短編 “Mr. and Mrs. Elliot” について “ The manipulated narrative allows readers to become aware of different subplots ”(126)と語っているが、こうした意見は、この「僕の父」のジョー少年の語りにも意味を持たせる証拠となるのではないか。一人の作家が書いた作品は別作品にも同じような特徴が表れる。冒頭の単純な子供の語りに何らかの意味を見出せるかもしれない三人の批評家の意見である。

では作品の最後の少年の語りはどのようなものだろうか。“ But I don't know. Seems like when they get started they don't leave a guy nothing ” (160)。最後のこの文章は少年の発見を表すものである。作品冒頭が論理の通らない意味の不決定から始まるのなら、作品の終末は少年の悟りであり、意味の決定した終わり方と言える。

本稿では作品の始まりと終わりの文章に注目して、作品の構造にそれらがどう関係しているかを明らかにする。論理の通らない意味の不決定から始まる冒頭の文章と発見という意味の決定で完了する作品終末の特徴が、いかなる意味を持っているかを明らかにしたい。作品のタイトルにあるように父親との関係を軸に論を展開することにするが、絶対の世界である父親以外の世界にも触れて、少年の心理を考察する。

1. 父親との理想世界

父親との世界はジョー (Joe) 少年にとって理想の世界であり、馬を中心にした世界である。学校にも行っていないことを考えたなら、少年にとっては狭い閉ざされた世界と言える。少年にとって父親は絶対の存在であり、理想を表す存在である。少年には理解できないが、父親がいかさまレースをやっていることを咎められ、“ You son of a bitch ” (153)とイタリア人から言われた時も、彼は父親をそんな風に平気で呼べる人間がいるってことが不思議だった、と語って

いる。競馬と父親と自分、これがジョー少年にとって関係する世界であり、閉じた理想世界となっている。馬と父親を同一線上に考えるジョー少年のそれらの理想化がわかる場面を引用してみる。騎手をやっている父親の関係する競馬についてのジョー少年の考えである。

I was nuts about the horses, too. There's something about it, when they come out and go up the track to the post. Sort of dancy and tight looking with the jock keeping a tight hold on them and maybe easing off a little and letting them run a little going up. Then once they were at the barrier it got me worse than anything. Especially at San Siro with that big green infield and the mountains way off and the fat wop starter with his big whip and jocks fiddling them around and then the barrier snapping up and that bell going off and them all getting off in a bunch and then commencing to string out. You know the way a bunch of skins gets off. If you're up in the stand with a pair of glasses all you see is them plunging off and then that bell goes off and it seems like it rings for a thousand years and then they come sweeping round the turn. There wasn't ever anything like it for me. (152-3)

少年の競馬への興奮がよくわかる。馬が出走してから鳴るベルが千年も鳴り続けているようだ等と大げさな言葉も見られる²。馬がゲートの前に並ぶ時もジョー少年は「もう気がそぞろ」であり、コーナーを駆け抜けて来るときも「あんなに胸が高鳴る光景は他に見たことがない」という興奮ぶりである。父親に愛情を覚えて、それゆえ父親の職業の競馬が大好きな少年の姿が明らかになっている。

この少年の競馬に対する興奮はサン・シロという場所でのレースに対するものであるが、父親の冷めた考えとは正反対で興味深い。

父親は月のほとんどを毎日レースに出場し、サン・シロと住んでいる場所を往復し、一日おきに夜行で帰ってくる生活をみじめな生活だと少年に語っている³。少年の競馬への興奮とは反対の父親の冷めた態度である。現実を知る父親はジョー少年にこう語る。“None of these things are horses, Joe. They'd kill that bunch of skates for their hides and hoofs up at Paris” (153)。少年の興奮とは反対に殺されるだけの存在としての馬の運命を知っている父親である⁴。外を知る父親と父親の世界をすべてと考える少年の理想の内の世界の対比が明らかではないだろうか。ジョー少年にとって外の知らない世界は父親以外の世界であり、彼が知る世界は父親と馬という内側の理想世界なのだ。少年の限られた知覚力は父親以外の世界を知ることはない。少年にとって競馬の理想世界が彼の知っている世界である。

少年にとって異性に関心を持つのは当然のことである。ジョー少年はカフェで気になる女の子を見つけかわいいと思う。その時のジョー少年の考えを引用する。

Once there was an American woman sitting with her kid daughter at the next table to us and they were both eating ices and I kept looking at the girl and she was awfully good looking and I smiled at her and she smiled at me but that was all that ever came of it because I looked for her mother and her every day and I made up ways that I was going to speak to her and I wondered if I got to know her if her mother would let me take her out to Auteuil or Tremblay but I never saw either of them again. Anyway, I guess it wouldn't have been any good, anyway, because looking back on it I remember the way I thought out would be best to speak to her was to say, “Pardon me, but perhaps I can give you a winner at Enghien today?” and, after all, maybe she would have thought I was

a tout instead of really trying to give her a winner. (157-8)

気になる子がいて毎日その子とそのお母さんを探したジョー少年の様子が描かれている⁵。でも彼は結局二度と会えなかった。会ったにしてもそれ以上には発展しなかったと納得している。なぜなら彼が話す内容は、競馬の話だけなのだからと認めているジョー少年。ここでもジョー少年の世界は父親の世界から離れていない。

Margaret D. Bauer はヘミングウェイ作品に登場する女性キャラクターの単一的次元の特徴という一般的解釈に反対して以下のような評を述べているが、この場面のジョー少年のお気に入りの女の子についてはどう考えられるだろうか。

Hemingway is often criticized for his one-dimensional characterization of the women in his fiction. I would suggest that such critics are actually arguing with Hemingway's choice of focus. The problem they have with Hemingway's female character is not that they are one-dimensional (the numerous studies of them suggest otherwise), but that they are usually not central characters. (126)

父親の世界からの観点でお気に入りの女の子を考えるジョー少年にとって、この作品においての女性キャラクターは単一次元の役割でしかない。ヘミングウェイ作品についての女性キャラクターは単一次元的であるという一般的考えにボウワーは反対しているわけだが、少なくともこの作品においてはあてはまらない。ジョー少年にとってはお気に入りの女の子も自分の父親という単一次元の範疇を超えていない。

父親に尊敬と愛情を覚えるジョー少年の世界は父親を超える世界は分かっていない。いわば外界の世界は知らない理想の世界を生きている。外界を知らず、理想の父親の世界だけで自分の存在の意味

を知ることが出来るだろうか。自己の認識は外界との関係の中で確立されるものであり、父親の世界を離れる事で確立される。父の世界は理想の世界かもしれないが、ジョー少年にとってその世界は自分を知ることが出来ないまだ精神的に成長していない世界と言える。

2. 矛盾の世界という外界との関係

第1節ではジョー少年の世界は父親との世界にあり、理想の世界にいるという事を説明した。同時にそれは外界を知らないゆえに自分自身を知ることが出来ない世界である。この理想世界はいつかは終わるものだ。短編全体についての特徴を述べる Jennifer J. Smith は “ After all, establishing something, such as a neighborhood, a town, or a nation, necessitates knowing that it is impermanent ” (36) と述べている。父親の世界という理想世界はずっとは続かない。スミスが述べている隣人や町や国ではなく、このヘミングウェイの短編では父親との世界が確立されてはいるが、ずっとは続かない要素である。

あるレースでツァーという本命の馬に乗る騎手ジョージ (George) と話をする父親は “ Who will? ” (155) と問い、ジョージは “ Kircubbin ” (155) と答える。この二人のやり取りは誰にも聞こえないような耳元でのやり取りである。いかさまレースについてのやり取りなのだから、小声でのやり取りは当然である。ジョー少年は “ I knew something big was up because George is Kzar’s jockey ” (155) と何かを予感する。父親の世界の一つである馬の世界に何かの異変を察する。レースが終わった後のジョー少年と父親の会話を引用してみる。

“ Wasn’t it a swell race, Dad? ” I said to him.

He looked at me sort of funny with his derby on the back of his head. “ George Gardner’s a swell jockey, all right, ” he

said . “ It sure took a great jock to keep that Kzar horse from winning. ”

Of course I knew it was funny all the time. But my old man saying that right out like that sure took the kick all out of it for me and I didn't get the real kick back again ever, even when they posted the numbers upon the board and the bell rang to pay off and we saw Kircubbin paid 67.50 for 10. (157)

察してはいたが父親にいかさまレースについて教えられはつきりといかさまが分かった瞬間である。同時に今までのレースへの興奮も冷めた瞬間が描かれている。カーカピンの配当が高く、利益を出したにもかかわらず興奮は戻ってこない落胆した少年の様子がわかる。これは父親の職業への理想が壊れた瞬間でもある。ジョージという外界の人間の介入が契機になり、ジョー少年は父親の世界には別の面があるという知恵をショックとともに知る。父親への尊敬と愛情はまだ失っておらず、作品の終盤でもそれは維持されているが、別の世界があると知ったのは間違いない。ジョージという外界の人間の介入によって父親の世界の別の面を察し、そしてそれをはつきりさせたのは父親自身の言葉によってなのだ。理想を作る父親と理想を壊す父親の矛盾した働きがジョー少年には作用している。

いかさまのレースは当然よくないことだし、ジョー少年はそのことを知っている。父親が最後に出たレースで馬同士の衝突があり、父親はその事故で命を失う。悲しみで大泣きするジョー少年は、観客がゲートから出るときに二人の男が以下のような言葉を発するのを聞いてしまう。

“ Well, Butler got his, all right. ”

The other guy said, “ I don't give a good goddam if he did, the crook. He had it coming to him on the stuff he's pulled. ”

“ I'll say he had, ” said the other guy, and tore the bunch of

tickets in two.

And George Gardner looked at me to see if I'd heard and I had all right and he said, " Don't you listen to what those bums said, Joe. Your old man was one swell guy. " (160)

ジョー少年の悲しみに追い打ちをかけるような観客二人の言葉である。父親の死は当然の報いである、とする言葉に対してジョージはあんな連中の言葉には耳を貸すな、やくざな連中なのだからとジョー少年を慰める⁶。しかし、悲しい現実ではあるが、ジョー少年自身も彼らが言う言葉には正しさが含まれており父親のいかさま競馬という世界が間違っているのを知っている。父親は死んでもう戻らない。父親の乗っていた馬は怪我をしながらも三本足で走ることは出来た。実際、競走馬の骨折とは致命傷であり殺されることも多い。ジョー少年はそのことを知らないで、以下のような感想を述べる。“ I couldn't help feeling that if my old man was dead maybe they didn't need to have shot Gilford. His hoof might have got well. I don't know. I loved my old man so much ” (160)。父親が死んだのだから、ギルフォードは殺さなくてもいいのではないか、という考えは父親が悪いことをして罰せられ死んだのだから、関係のない馬まで殺さなくてもいいのではないか、という心の訴えでもある。父親のいかさまの悪さについてジョー少年は十分に意識しており、悲しいながらもその妥当性を認めている。だから父親はもう死んだのだから馬は助けてやってもいいのではないか、という考えが浮かぶ。ゲートを出る男二人の観客の会話が実は正しい評価であり、父親が作るいかさまの世界が間違っている、という事を悲しいながらも、そして父親を慕いながらも理解しているジョー少年と言えるであろう。

父親が悪い事をしているのは分かっているが、大好きであるという矛盾。そしてそれは父親とジョー少年の二人だけの世界では起こりえない。父親以外の外の世界を通してその矛盾を経験するジョー

少年である。外に触れることでジョー少年は父親といたただけではわからない世界を知ることが出来、新たな知識を得る。少年の獲得した知識は限定的なものではあるが、新たな知識に変わりはない。第1節で述べた父親の理想の世界、そしてこの第2節で述べたジョー少年の経験する理想世界の崩壊と矛盾による知の獲得を踏まえて結論で本稿の問いに答えを出してみたい。

結論

本稿の問いは作品冒頭の少年の論理の通らない文章、つまり父親が人生の後半で太りだしたのは父親の責任ではなく、競馬の障害レースにしか出ていないから太ったという的外れな文章と、作品最後の「僕にはわからない。世の中にはせっかく本気で何かを始めても、結局何も残らないようだ」という文章の関連性を証明することであった。冒頭の論理の通らない不決定から作品最後の発見という意味の決定の特徴が作品の内容とどうかかわるかを明らかにすることである。

ジョー少年は父親という理想の世界、競馬に対しての理想から、父親がいかさまのレースをやっていると知り、実は父親は正しくない世界にいて、父親を悪く言う人たちが正しい評価をしていたと知る。理想の世界しか知らなかった無知から傷ついて真実を知り、父親の世界の真実を知るという知を獲得する。無知から知の獲得のプロセスは、作品最初の少年の父親の肥満についての意味不明な説明と終盤の発見の文章の関係と同じではないか。少年の作品中の成長、無知から知の構造と作品冒頭と作品最後の文章の構造は重なるのである。つまり作品冒頭と作品最後の文章はジョー少年の知の獲得のプロセスの時系列を表している。

ヘミングウェイにはつらい経験からの知の獲得という特徴の作品が他にもあるが、例えば『老人と海』(*The Old Man and the Sea*, 1952)を述べた Mario Vargas Llosa の “ A sad but not a pessimistic

story, it shows that under the direst trials and tribulations, a man's behavior may transform defeat into triumph and add meaning to his life ”(44)という言葉は、老人と少年という違いはあるが、人生についての意味を知るという点で共通である。知獲得は少年の父親の死と同じように悲しみの後に得られている。

本稿では作品の最初と最後の文章の関係性は、少年の無知から知の獲得のプロセスの関係と同じであると答えを出した。父親の死で思い出されるのは、エディプス・コンプレックスという心理学の概念である。父親殺しという少年の精神の成長過程を、今回のジョー少年の父親の偶然の死という出来事に関係づけて、精神的成長を語ってみるのも面白いと思う。理想の存在であった父親の死、理想の世界の代表であった馬の死、そして少年の精神的成長。本稿冒頭で述べたヨーロッパの息子としてのアメリカという大きな問題にも敷衍できそうな、まだ多くの読みが可能な多面的作品ではないだろうか。

註

1. 以下、「僕の父」からの引用は Ernest Hemingway, “ My Old Man ”、*The Complete Short Stories*, Scribner 社、2003年の所収の同名作品に拠る。
2. こうした千年という時の長さは、少年の興奮を表すとともに、非現実性を示唆している。少年は気づいていないが、のちに明らかにされるレースのいかさま性の嘘などにも関連付けられうる。
3. この作品で金銭面での困窮は少年に一切明らかにされていないが、父親がいかさまレースをやらなければいけない理由は金銭面での困窮にあると思われる。父親が語るみじめさには金銭面での困窮が暗に意味されている。
4. 作品終盤で父親は事故死するが、この父親による馬についての評価、使われるだけで殺される、というのは自身の事故死のフォアシャドウになっている。馬の運命と父親の運命が重なっている。
5. 幼少期の母親の愛情不足は、大人になってからの女性に対しての束縛や依存心の強さ、承認欲求の強さなどの特徴がみられるとされているが、ジョー少年の毎日彼女たちを探した、というこの行動は、父との生活の中で、心の奥での母なるものへのあこがれを表しているとも考えられる。
6. ジョーを慰めるジョージも実は、父親と同じような立場にあり、弱い立場にあるという現実がある。弱い者同士での傷の舐め合い、が表現されているが、少年は成長後にそのことをやがて知ると予想できる。

引用 · 参考文献

- Bauer, Margaret D. . “ Forget the Legend and Read the Work: Teaching Two Stories by Ernest Hemingway.” *College Literature* , Summer, 2003, Vol. 30, No. 3 (Summer, 2003), <http://www.jstor.com/stable/25112742>, pp. 124-37.
- Daiker, Donald A. . “ How a Hemingway Story Works. ” *Twentieth Century Literature* , Winter 2010, Vol. 56, No. 4 (Winter 2010), <https://www.jstor.org/stable/41413717>, pp. 559-66.
- Dömötör, Teodóra. “ Anxious Masculinity and Silencing in Ernest Hemingway's "Mr. and Mrs. Elliot". ” *Hungarian Journal of English and American Studies (HJEAS)* , Spring, 2013, Vol. 19, No. 1 (Spring, 2013), <https://www.jstor.org/stable/43487853>, pp. 121-33.
- Flora, Joseph M. . “ Names and Naming in Hemingway's Short Stories. ” *South Atlantic Review* , Winter, 2004, Vol. 69, No. 1 (Winter, 2004), <http://www.jstor.com/stable/3201563>, pp. 1-8.
- Garrigues, Lisa. “ Reading the Writer's Craft: The Hemingway Short Stories. ” *The English Journal* , Sep., 2004, Vol. 94, No. 1, Re-Forming Writing Instruction (Sep., 2004), <https://www.jstor.org/stable/4128849>, pp. 59-65.
- Hemingway, Ernest. “ My Old Man. ” *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, Ed. Patrick John and Gregory Hemingway, Scribner, 2003.
- Llosa, Mario Vargas. “ Hemingway. ” *Salmagundi* , Fall 2000 - Winter 2001, No. 128/129 (Fall 2000 - Winter 2001), <https://www.jstor.org/stable/40549252>, pp. 42-7.
- Mandler, Lou. “ Ernest Hemingway's West. ” *Montana The*

Magazine of Western History , Autumn 2011, Vol. 61, No. 3
(Autumn 2011), <https://www.jstor.org/stable/23054757>, pp.
22-37, 93-4.

Smith, Jennifer J. . “ Locating the Short Story Cycle. ” *The
American Short Story Cycle*, Edinburgh University Press,
<https://www.jstor.org/stable/10.3366/j.ctt1tqxb3j.5>, pp.12-
36.